原智恵子と神戸女学院

津　上　智　実

Summary

Pianist HARA Chieko and KOBE COLLEGE

TSUGAMI Motomi

Pianist HARA Chieko (1914–2001) is now under revaluation. She was the first Japanese pianist who completed the Conservatoire de Musique de Paris with Premier Prix (1932) and also won a special award at the Third International Concours de Chopin in Poland (1937). She was the most popular, most admired pianist in Japan around the Second World War.

HARA Chieko held a professorship at KOBE COLLEGE from April 1957 to March 1961. It is a mystery why she accepted it, because she refused all the other offers from universities in Tokyo including even GEIDAI (the National University of Fine Arts and Music). What made her decide to come to Kobe and make time to teach students?

My research in programs of her concerts and articles and interviews in some periodicals and journals in her time has made the following clear.

1) She gave two concerts for KOBE COLLEGE in 1935 and 1951, through her mother's connection. Her mother Hisako was one of KOBE COLLEGE's alumnae.
2) The autumn of the year 1955 was a turning point for her life. She noticed the necessity to hand down her skills and knowledge to younger generation as her master Lazar Levi did.
3) In the year 1956 KOBE COLLEGE earnestly asked her to join, offering her conditions which allowed her to continue her activity as a concert pianist. On 2 November 1956, she visited KOBE COLLEGE and gave a mini concert, of which many photos have been kept.
4) She selected three students as her pupils by audition for the academic year 1957, and one more for 1958. Her lesson took place once a month at Room M34.
5) In addition, four alumnae were given chance to play, as solists, piano concertos by Beethoven (Nos. 3 and 5), Ravel and Schumann with orchestra as 'HARA Chieko's pupils' in spring, 1958.
6) She wrote a letter to the President of KOBE COLLEGE on 1, September 1980. It is evident from this letter that she was proud of her contribution and her pupils, some of them were teachers of the College.

HARA Chieko left Japan in December 1958 to marry the Celist Gaspar Cassado. The curricula of the academic year 1959 and 1960 have her name in the list but with a comment 'now in France'. Her tenure was short, but her legacy is profound.

1）原智恵子再評価の動き

本論は、近年再評価の機運が高まっているピアニスト原智恵子（1914～2001）について、神戸女学院大学との関わりを明らかにしようとするものである。神戸女学院は原智恵子が教鞭を執った唯一の大学であるが、これまでその実態は知られていない。関係者の間で語り継がれるだけで放置すれば、風化してしまう怖れもある。掘り起こしを進めながら順次公表していく必要があるだろう。本論はその最初のものとして、在任期間、教授の実態等を扱うが、他大学からの就任要請を長年断り続けていた原智恵子がなぜ本学赴任を受け入れたのかが最も大きな疑問である。ここでは本学に残る文書や当時の雑誌や新聞のインタビュー記事などを手掛かりに、できるだけ原智恵子本人の言葉を拾いながら論を進めたい。

これまでの原智恵子再評価の流れを振り返ってみると、まず2001年12月、最初の評伝である石川康子『原智恵子　伝説のピアニスト』（ベスト新書）が出版された直後（12月９日）に原智恵子が亡くなり、新聞各紙でも報道されて話題になった。これを機に録音の掘り起しが行なわれ、2002年10月に最初のCD『原智恵子　伝説のピアニスト』（コロンビアミュージックエンタテインメント、DENON: COCQ-83614）が出された[1)]。

2004年には、原智恵子の遺品の楽譜の中から、長年行方不明になっていたJ. S. バッハの結婚カンタータBWV216（1728年作曲）の楽譜が再発見されたことで大きな話題となった（2004年４月３日付新聞各紙。毎日新聞は朝刊のトップ記事として報道した）。また、２月21日にTBSテレビ「世界ふしぎ発見！」で「東洋の奇跡……伝説のピアニスト原智恵子」が放映され、10月には２枚目のCD『パリの原智恵子』（コロンビアミュージックエンタテインメント、DENON: COCQ-83850）が出された。

こうした動きに刺激されて、本学でも神戸女学院大学アートマネジメント研究会（2002年７月発足、代表（当時）大学院文学研究科生井原麗奈）の学生たちが原智恵子の軌跡を辿りたいと企画して、2004年12月３日（土）、本学講堂において「原智恵子メモリアル・コンサート」[2)]を、また12月１～22日に図書館本館および総務館廊下において「原智恵子写真展」を開催した。筆者は研究会顧問として学内各部署へ協力依頼に回る中で、学院史料室において原智恵子の岡本道雄院長宛書簡（後述）を、院長室において「原智恵子、福沢アクリヴィ教授就任披露演奏会」プログラムとガスパール・カサド来院時の写真を、また神戸女学院教育文化振興めぐみ会において演奏会後の茶話会の写真（後掲【写真１】）を見出し、これらは写真展に供された。

2）原智恵子というピアニスト

原智恵子（1914年12月25日須磨に生まれ、2001年12月９日東京に没する）は戦前、日本人として初めてフランスの国立パリ音楽院をプルミエ・プリ（一等首席賞）で修了し（1932年、17歳）、ポーランドの第三回ショパン国際コンクールで日本人初の受賞を果たしたピアニストで

ある(1937年、22歳)。マネージャーもついて本格的に演奏活動を開始しようとした矢先に、第二次世界大戦の勃発で帰国を余儀なくされた。戦争中はラジオ放送を通じて、また全国を演奏旅行して、国民的な人気を得ていた。戦後すぐの頃も、ラジオの演奏会といえばまず原智恵子、それに諏訪根自子（1920年生)、巌本真理（1926～1979）らの出番で、皆かじりつくようにして聴き入っていたという[3]。井口基成（1903～1983)、江藤俊也（1927年生)、園田高弘（1928～2004）らが活躍するようになるのはもう少し後である。

情感豊かな演奏に加え、女優並みの美貌と、パリの良家で仕込まれた洗練された趣味と身のこなしで、とりわけ女学生に絶大な人気があったという。ピアノを弾くステージ姿だけでなく、私生活についても、当時の雑誌などの巻頭グラビアでしばしば大きく取り上げられている。その結婚は映画スターや歌舞伎俳優以上に大きく扱われていて驚かされる。「美空ひばりと同じくらい人気のあった原智恵子」[4]という表現も誇張とは思われない。その後も、子どもたちとの幸せそうな写真が掲載されるなど、時の人であり続けたことが如実に感じられる。

その原智恵子が女学院の教授になったのは、1955年10月に2年余りの滞欧から帰国した後のことである。この滞欧中にはパリ音楽院の試験審査員を務めた他、パリのコンセール・パドルーにおけるピアノ協奏曲（1953年11月1日)、サル・ガボーでのリサイタル（1954年11月30日）とヨーロッパでも屈指の舞台で大きな成功を収め、さらにブリュッセル、ロンドン、バルセロナなどヨーロッパ各地で演奏家としての名声を確立している。帰国後は帰朝演奏会に始まって演奏会が目白押しの状態である。ここで大学職に就くことは演奏家としてはむしろ妨げになるのではないだろうか。現にそれまであらゆる大学からの申し出を断り続けてきた原智恵子である。それなのに一体なぜ女学院の教授となることを受け入れたのだろうか。

ちなみに、上記石川康子著の伝記では、「智恵子はしばらくの間、神戸女学院音楽科の教授となり、学生にピアノを教え始めた」とあるものの、その次の文は「では東京の弟子たちはどうなったのだろうか」(214頁）と話題を転じてしまっており、女学院時代については全く何も触れられていない。その実態はどのようなものだったのだろうか。そもそも原智恵子と神戸女学院との間にはどのような繋がりがあったのだろうか。

3）玉川大学教育博物館の所蔵資料より

原智恵子の関連資料は、1991年の最終帰国の際、ご子息の川添光郎氏によって玉川大学教育博物館に寄贈された。フィレンツェから直接、ダンボール70箱が送られてきたという。その内、60箱は夫でチェリストのガスパール・カサド関連、10箱が原智恵子関連とのことである。

2004年9月、筆者が玉川大学教育博物館を初めて訪れた際には、原智恵子の演奏会プログラムは未整理のまま順不同でダンボールに入っていた。それらを年代順に仕分けする作業をする中で、女学院関連の演奏会プログラム3点を発見した。その内2点は残念ながら本学には所蔵されておらず、また残り1点も学院所蔵分は展示に問題があったため、上記写真展に当たって玉川大学教育博物館より借用して展示に供した[5]。

その最初のものは、1935（昭和10）年6月25日（火曜日）午後7時半より日比谷公会堂で行

われた「原智恵子、モギレフスキー演奏会」である。これは神戸女学院同窓会東京支部が、岡田山に移転して間もない本学のために基本金募集の一助として企画したもので、プログラムの裏表紙に次の様に記されている。

「神戸女学院は日本に於ける女子教育最高機関の一として創立以来二千五百に達する卒業生を出し、八百余の学生を擁して高い理想実現を目ざしつつ基督教の下に自学自治のよき教育を続けてまいりましたが、財政的にも亦確たる基礎を固［め］るべく此の十月創立60周年を迎へるに當り基本金募集のことが計画されました。同窓会東京支部はその募金の一助として同窓生の一人なる原氏の令嬢及び学院音楽部と関係浅からぬモギレフスキー氏のご出演を得、此の演奏会を開催いたしました」。

ここで「同窓生の一人なる原氏」とは12回生の原（旧姓中村）久子氏で、『神戸女学院百年史各論』（220～221頁）によれば、卒業後、前橋共愛女学校教師を務められた。川崎造船技師の原粂太郎と結婚して三男二女を得、智恵子はその第四子で長女であった。

この演奏会では、モギレフスキーのヴァイオリン独奏[6]と交互に原智恵子（当時、二十歳）のピアノ独奏がプログラムされている。演奏曲目は「セザール・フランク〈前奏曲、衆讃曲、遁走曲〉、ショパン〈譚詩曲［バラード］〉作品47、リスト〈溜息〉（演奏会用練習曲）と〈タランテラ〉（ヴェニスとナポリ）」の４曲である。

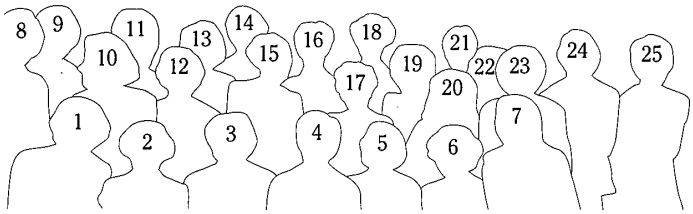
二番目のものは、1951（昭和26）年10月22日（月）午後３時半より神戸女学院講堂で神戸女学院大学自治会主催により開かれた「原智恵子ピアノ・リサイタル」である。スカルラッティの〈二つのソナタ〉、ハイドン〈ソナタニ長調〉、フランク〈前奏曲・合唱曲・遁走曲〉、ドビュッシー〈子供の領分〉、ショパン〈ソナタ変ロ短調〉作品35、ショパン〈夜想曲ハ短調〉作品48の１、ショパン〈スケルツォ第二番〉を演奏している。当日の配布プログラムには当時の畠中博院長が次のような言葉を寄せている。

「音楽会プログラムに

我学院は国際精神を以って教育の基本の一として今日に到つて居りますが、音楽こそは最も国際的な言葉であって世界の人々を一つとならしむる大いなる力であります。

今回、我国に於ける最も優れた演奏者であり又母君が我学院の卒業生である原智恵子女史を迎えて、大学学生自治会主催の下に音楽会を開催なし得た事は我等の誇りであります。」

この演奏会終了後の茶話会の写真【写真１】が神戸女学院教育文化振興めぐみ会に保存されている（藤田トキ寄贈アルバムⅣ所収）。原智恵子（当時、三十七歳）を囲む一同のあふれるような笑顔から、この会の雰囲気がよく窺われる写真である。ここには後年、原智恵子の招聘に力を注いだ藤田トキ音楽学部主任教授と塚本保子助手[7]が含まれている。若い人に大変人気のあった原智恵子は大学や高校などに招かれることも多く、東京大学、慶応大学、上智大学、聖心女子大学、甲南高校、小林聖心学院などでも度々演奏しており、学生の招きで大学で演奏すること自体は珍しいことではないが、ご母堂の母校でのこのリサイタルが後の教授就任に至



【写真１】1951年10月22日、神戸女学院大学自治会主催リサイタル後の茶話会にて、
総務館院長室にて（神戸女学院教育文化振興めぐみ会蔵）

1）那須美恵子先生、2）高山(旧姓朝倉)和子、3）山田康子先生、4）原智恵子、5）藤田トキ先生、6）清水郁子、7）本多(増本)昭子、8）安川(阿曽沼)豊子、9）片平(山田)英子、10) 柳原(斉藤)恵美子、11) 堺(羽室)美津子先生、12) 八代(田代)仁和子、13) 茂貫(下里)咲子、14) 秋山(塚本)保子先生、15) 田中(宮城)千代先生、16) 飯尾(岡本)房子先生、17) 新庄(池原)順子先生、18) 立川暢巳、19) 広田(太田)ミチ、20) 大津寄(矢野)多美子、21) 魚住千代子、22) 清水葉子、23) 山中(網谷)純枝、24) 豊田寿子先生、25) 深田(西川)尚子

る一つの大切な契機になった可能性も考えられる。

三番目のものは、1957（昭和32）年１月29日に大阪朝日会館において神戸女学院主催で開かれた「神戸女学院大学音楽学部教授就任披露演奏会」である（この演奏会については次節で扱う)。この時のプログラムは院長室にも残されているが、アルバムに貼り込んであるため展示に問題があった。そこでこれも玉川大学教育博物館から借用した。

その後、玉川大学教育博物館では嘱託職員を一名増員して、原智恵子関連資料の整理を継続して下さっている。将来の博物館移転の際には、アルベルト・シュヴァイツァー展示室、ガスパール・カサド展示室と並んで、原智恵子展示室を設ける構想もあるとのことで、今後が楽しみである。

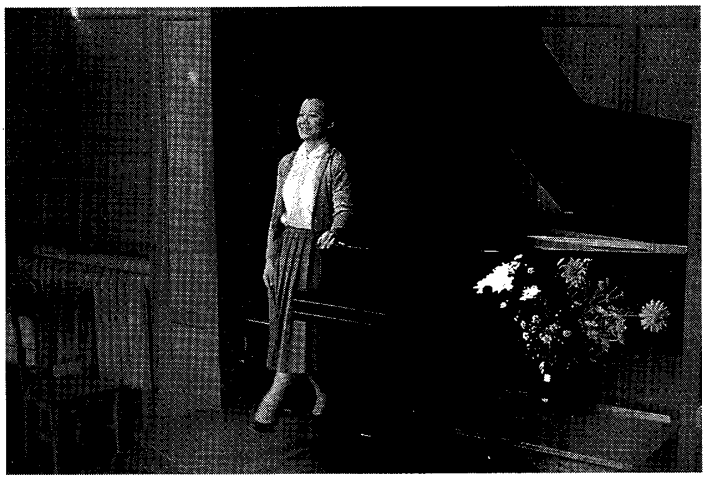
４）神戸女学院の教授時代

原智恵子の本学在職期間は1957年４月から1961年３月までの４年間である[8)]。しかし1958年12月には渡欧し、翌1959年５月９日にはカサドと結婚してフィレンツェに落ち着いてしまう。したがって実質的には渡欧までの１年８ヶ月間、本学で教鞭を執ったことになる。1959年度と1960年度の『学修便覧』においては「第３章役職並びに授業担当氏名」に「教授原智恵子ピアノ」とあるものの、「付表第５音楽学科専攻科目」表では「ピアノ Major 担当者：……［中略］

……原（在仏）」と記載されている。

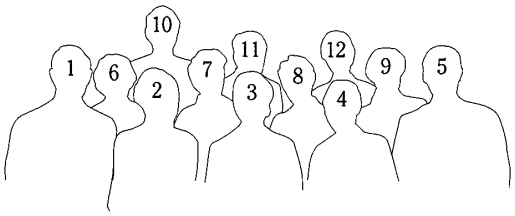
就任に半年先立つ1956（昭和31）年11月２日、恐らくは挨拶のために本学を訪問し、学生のためにミニ・コンサートを行っている。この時の写真が関係各所に多数残されている。【写真２】は音楽部の旧コーラス・ルーム（改築されて現存しない）においてカーディガン姿で演奏した直後のもの[9]。この日、学院の中庭で一人で撮った写真【写真３】はブロマイドとして購買部で販売されていたそうである。また、総務館前で難波紋吉院長兼音楽学部長や音楽学部教職員と撮った写真【写真４】や、音楽館前で学生たちと撮った写真なども各種残されている。

さらに、1957（昭和32）年１月29日（火）午後７時より大阪朝日会館において「原智恵子、福沢アクリヴィ教授就任披露演奏会」が神戸女学院主催、朝日新聞厚生文化事業団後援で行なわれた。この時の舞台写真【写真５】が音楽学部に、当日のプログラムが院長室のアルバムに残されている。難波紋吉院長兼学長兼音楽学部長がプログラムの巻頭辞に次のように記している。

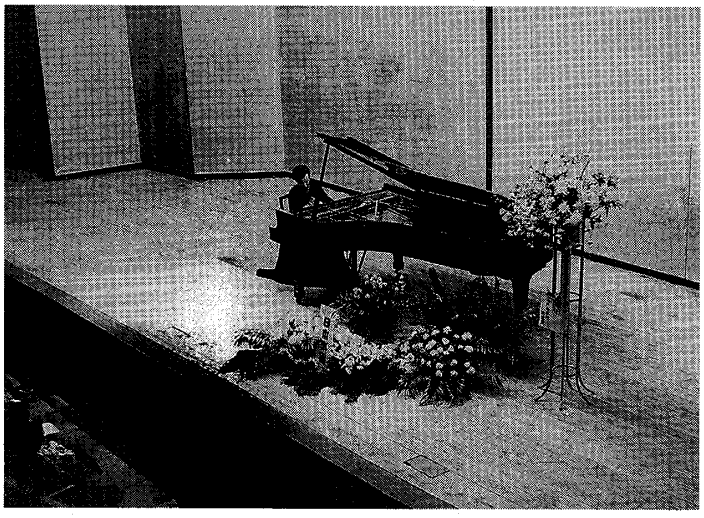


【写真２】1956年11月２日、学生のためのミニ・コンサートで、音楽館旧コーラス・ルームにて（音楽学部蔵）

【写真３】1956年11月２日、講堂の横の芝生にて（M75飯野奈津子氏蔵）



【写真４】1956年11月２日、音楽学部教職員と、総務館前にて（M75飯野奈津子氏蔵）
前列左より、１）ラーソン音楽学部主任教授、２）塚本保子助手（ピアノ）、３）原智恵子、４）野崎住子教授（声楽）、５）難波紋吉院長兼音楽学部長、６）鈴木田津子講師（声楽）、７）浅田綾子教授（ピアノ）、８）下里智恵子講師（声楽）、９）古武滋野助教授（ヴァイオリン）、10）水谷知久教授（作曲）、11）畑きみ子講師（声楽）、12）清水素子氏（事務・通訳）



【写真５】1957年１月29日、神戸女学院大学音楽学部教授就任披露演奏会で、
大阪朝日会館にて（音楽学部蔵）

「今回、幸いにして、原智恵子女史をピアノの教授として、また福沢アクリヴィ女史[10]を声楽の教授として迎えることになったことは、神戸女学院音楽学部にとっては画期的な出来事であり、今後に於ける飛躍的発展を約束されたものといってよいのである。私はこれらの国際的に有名な音楽家をわが教授として招聘し得たことを衷心から悦び、また感謝するものであるが、同時にこれによって音楽学部が一層充実・発展し、単に地方的な音楽学部にとどまることなく、全国的なものとなり、更に国際的なものとなって、より大きい

貢献をするであろうことを希望し、又夢見ているのである。

この音楽会は、主としてこれらの新しい二人の教授を御披露するために催されたのであるが、私はこの機会に神戸女学院とその音楽学部に対する皆様のよりよきご理解と御後援が得られるならば、これに越した幸いはないと思っている」

演奏曲目は、スカルラッティ〈ソナタニ短調〉と〈ソナタニ長調〉、ショパン〈ソナタロ短調〉作品58、ラヴェル〈ソナチネ〉である。ラヴェルの〈ソナチネ〉は、ここ一番という大事な演奏会で決まって取り上げたいわば決め球の曲目であり、原智恵子がこの演奏会を重要視していたことが分かる。

この披露演奏会について、『神戸女学院学報』第3号（昭和32年3月10日発行）に作曲の水谷知久教授が報告を書いている。それによれば、「両女史共第一級の演奏家として著名な方でもある、パリ音楽院の出身であるだけに優雅なフランス音楽を多く聞かせてくれた。／原女史の演奏はピアノ［の］最初の音から最後の音に至るまで、実に魅力たっぷりな、しかもニュアンスに富む好演で聴衆を恍惚たらしめ、更にアンコールのドビュッシー作曲の「沈める寺」で一層の貫禄を示された……［中略］レパートリーの広い有力な教授方の就任を得て音楽学部は一層の進展を示す事と思う」と記している。この記事は『めぐみ』第38号（昭和32年4月20日発行、14頁）にも引用して掲載されている。

こうして原智恵子は1957年4月から音楽学部教授となり、学生の指導を始める。実態は月一回の東京からの出張授業で、生徒はオーディションによって選ばれた。下記のように、初年度の選抜生は三名で、翌年さらに一名が選ばれた。オーディションは音楽館2階のM35室において、またレッスンは当時の浅田研究室（M34室、現在の音川研究室）で行われた。

1957年度選抜生	M75（1958年卒業）	尾崎文子	
	M76（1959年卒業）	田守（旧姓八木）三与子	
	M77（1960年卒業）	湊（旧姓辻）朱美	
1958年度選抜生	M79（1962年卒業）	KOCH Hisako（旧今嶺尚子）	（敬称略）

1957年6月2日の神戸新聞に「教壇の原智恵子さん」と題するインタビュー記事が写真入りで掲載されていて、当時の様子を知ることができる。以下に全文を掲げる。

有名なピアニスト原智恵子さんが、この四月神戸女学院の先生として月一回東京から出張教授しています。演奏では数知れぬほどステージを踏んだ原さんですが、教壇に立つのはこんどが初めて。そこで二度目の出張教授のあった五月のある日、原さんにいろいろ聞いてみました。

—女学院へ原さんを招きたいという話はいつごろからあったのですか。

原　去年の暮れでした。その前にも上野から来てほしいといわれたのですが、この方は週一、二回ということなのでどうも荷が重く、気が進みませんでした。

—そのほか女学院とはなにか特別の関係でも？

原　死んだ母と姉がどちらもここでお世話になりましたし、私も神戸の出身ですから……。

—教授になってもよいと決心された理由は？

原　一昨年、パリから帰った当座ちょっと体の具合が悪くてブラブラしていました。入院もしましたが、そのときしみじみ「心細いな」と思ったのですよ。というのはこれまで何回も舞台に立ってきた。それはそれなりに聴いてもらった人たちの心を引きつけ、音楽のよさを刻みつける役目を果たしたかも知れません。でもね、私にしてみたらそれも結局、線香花火のようにはかないものではないでしょうか？心細いと思ったのはそういうワケなの。むろん私はまだ未熟ですし、先生になるなんて実際は遠慮しようと考えていました。だけど、やはり一生をかけてやった仕事のなかでなにかは残しておきたい—。それには私の体験をお弟子さんに伝えるのが最良の方法だと思い直したのです。

—女学院の印象はどうですか。

原　とてもいい環境ですね。鳥のさえずり、風に吹かれる松の音が聞こえるだけで、ちっとも騒音に悩まされない。こんな場所こそ音楽に大切な‘幻想の世界’を提供してくれます。

—ここの音楽部の生徒をみんな教えていらっしゃるのですか。

原　いいえ、三人だけです。それも十二人の中から試験して選んだのです。それでは不公平だという意見もあるでしょうが、私はむしろその方が励みになると思うのよ。また人数ばかり多いだけではかえって生徒も迷惑でしょう。私は自分の生徒を独占するつもりはありません。ただ生徒の持っているものにプラスするものがあれば……と思っているだけなのよ。少人数の方がよいか悪いか、二、三年待ってからのことね。

—どういう方法で教えるのですか。

原　まずは厳しい訓練。ピアノのテクニックの基礎はこの訓練です。テクニックはあくまで肉体的なものですから、若いうちほどよい。しかし、あまり技術だけを大切にするとこんどは‘音楽の魂’を忘れる。この二つを調和させながら高めていくことが私の大事な仕事だと考えています。この点、月一回の授業ではムリかも知れませんが、追々こちらの方に力を注ぐつもりです。

—最近、幼稚園にもいかない前からピアノ、バイオリンを習うことがはやっていますが……

原　私は大賛成。むしろ絶対必要ね。そしてただピアノが弾ける、バイオリンが弾けるというだけでなく、よい音楽をきかせることです。そうすれば自然にリズム、音楽美に対する感受性が豊かになります。私の意見では音楽に関する限り小、中学校のころでその人の一生は決まると思うのです。お母さんのなかには小さい子供にシンフォニーなどきかしてもムダだと考えていらっしゃる方もあるでしょうが、むしろ子供の方が芸術に対する感覚がすぐれているかも知れない。ですから家庭でもどしどしレコードなどを楽しんでほしいものですね。

—目下、取組んでいらっしゃるような問題があったら……

原　人を教えるって、随分むつかしいなと痛感しているのよ。やはり教えるったって限界があるでしょう？私ね、天性は一生変わらないと思うの。ただよい教育をしたときは間違った方向に進まないと確信しているだけ。それより私の生徒が私のよいところだけを吸収してくれたらと思っています。それから私の夢はね、ここに室内楽クラスを作ったり、音楽部の建物を作ったり、ゆくゆくは男子の生徒にも入ってほしいということなの。でもちょっとムリかな（笑）いまのままではお嬢さん芸の域を脱していません。そうすれば関西の音楽センターになるってものでしょう？

—音楽をやりたいと思っている人たちに先輩としてなにか……

原　むつかしい注文ね（笑）そう……音楽って決してむつかしいものじゃない。ただ教わるより自然に入れること、そしてまず好きになること……よね。」

この記事から、就任当時は数年様子を見ながら教えていくつもりであったこと、女学院を関西の音楽センターにする夢を持っていたことが分かる。なお、ここで原智恵子が夢として語ったことの内、室内楽クラスを作ることと音楽部の［新しい］建物を造ることはその後の音楽学部の展開の中で実現している。

5）演奏活動と教授活動

本学教授となった後も原智恵子の演奏活動はほぼ途切れることなく続けられた。次頁の【表1：原智恵子の演奏歴：1955年の帰国から1958年の離日まで】は、関係各位から本学に提供された演奏会パンフレットおよび上記玉川大学教育博物館所蔵の演奏会パンフレットから再構成したものである。その足跡は北は北海道から南は九州にまで及んでいる。特に1957年の秋は各地労音の演奏会で集中的に演奏し（10月にはリサイタル19回をこなしている）、1958年春には第一回大阪国際フェスティバルが開催されて、チェロのガスパール・カサドと各地で演奏している。

その中で、1958年5月16日（金）にはカサドが来院し、講堂で演奏している。『神戸女学院学報』第7号（1958年6月30日発行）に掲載された「カサード氏来院」の記事には、「原智恵子教授の御尽力により」実現し、「氏の偉大な芸術を通じてにじみ出たその温かい人格は、聴衆一同の胸に深い感銘を残さずにはおかなかった」と記されている。演奏曲目は以下の通りで、演奏時間が短いところから、礼拝での演奏であったと思われる。

フォーレ〈エレジー〉（伴奏：原智恵子）
リムスキー・コルサコフ〈飛行する熊蜂〉（伴奏：ヘルムート・バルト）
アンコール：バッハ〈無伴奏パルティータ〉
　　自作〈グリーン、デヴィル〉

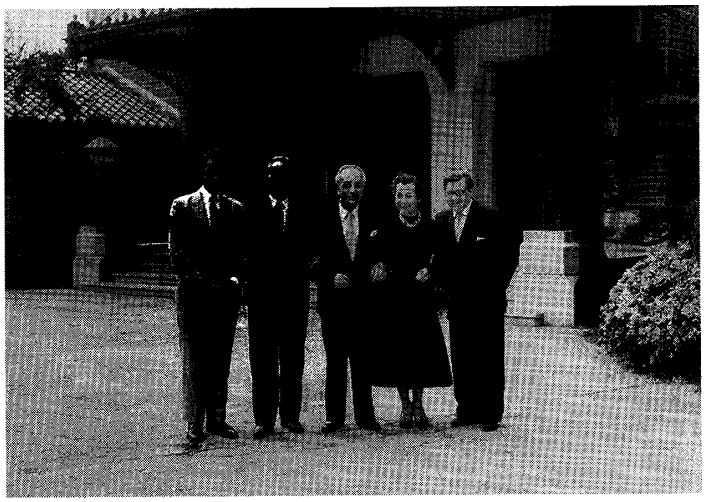
【表１：原智恵子の演奏歴：1955年の帰国から1958年の離日まで】
（年月日、地名：会場）（地名の記載のないものは東京）（中間報告：2005年４月８日現在）

1955年：［10月４日帰国］
12月20日（山葉ホール）

1956年：
１月19日（福岡：電気ホール）、21，22，23日（日曜２時、６時半）（大阪：産経会館）
２月８，９日（産経ホール）、11日（浜松：市立高校講堂）、28日（第一生命ホール）
３月７日（横浜：県立音楽堂）、13日（Kyomi Syukaisyo）
５月18日（３時、６時）（文化服装学院講堂）、21日（聖心女子大学講堂）、25日（京都：弥栄会館）、28日（神戸：神戸新聞会館大劇場、落成記念、ショパン協奏曲第１番）、30日（明石：市立王子小学校）、31日（大阪：産経会館）
６月25日（聖心女子大学講堂）
７月２日（札幌：市民会館）、４日（函館：HBC ラジオ劇場）、18日（三井田川：鉱士館）、19日（小倉：常磐高校講堂）
８月10日（名古屋：市公会堂）
９月４日（長野：第一市民会館）、19，20，21日（日比谷公会堂）
10月８日（山葉ホール）、９日（弘前：弘前学院講堂）、14日（日比谷公会堂）、15日（浜松：市立高校講堂）、20日（日比谷公会堂）、21日（延岡：野口記念館）、23日（大牟田：市民会館ホール）、24日（福岡：電気ホール）、27日（神戸：神戸国際会館大ホール、竣工記念）、29日（宝塚：宝塚大劇場）
11月４日（芦屋：芦屋学園講堂）、10日（２時、６時）（仙台：宮城学院大学講堂）、14日（岩手：県公会堂）、17日（名古屋：南山大学講堂）、20，21日（香川：県公会堂）
12月２日（兵庫：甲南女子高校講堂）、14日（大阪：朝日会館）、15日（福山：誠之館高校講堂）、16，17日（小倉：常磐高校）、18日（門司：テアトル金星）、19，20日（八幡：労働会館）、21日（大分：県体育館）、22日（熊本：太洋文化ホール）

1957年：
１月19日（東京大学第三十一番教室）、20日（宇都宮：栃木会館）、29日（大阪：朝日会館）『原智恵子、福沢アクリヴィ教授就任披露演奏会』
２月12日（山葉ホール）
３月４日（大阪：朝日会館、ショパン協奏曲第１番）、７日（山葉ホール）、15日（日本青年館ホール）、31日（日比谷公会堂）
４月［神戸女学院大学音楽学部教授就任］、15、16日（金沢：北陸学院栄光館）、30日（聖心女子大学、チェロと）
５月11日（上智大学）、17日（文化服装学院講堂）、23，24，25日（和歌山：市民会館大ホール）
６月13、14日（大津：滋賀会館）、19日（聖心女子大学講堂）、21日（横浜：県立音楽堂）
７月10日（大阪：産経会館）、11日（神戸：国際会館）
８月19日（２時、６時）（飯塚：市公会堂）
９月７，８（２時、６時），９，10，11，12，13，14，15，16日（京都：弥栄会館）、28日（宝仙学園ホール）
10月４日（名古屋：名鉄ホール、こけら落とし）、９，11，12，13（２時、６時），14，15，16日（大阪：毎日会館）、19日（尼崎：文化会館）、21，22，23，24，27，28，29，30，31日（大阪：朝日会館）
11月１，２（２時半、６時）日（大阪：朝日会館）、４日（広島：広大三原分校）、19日（弘前：At Togi Chapel）、30日（宝塚：小林聖心女学院講堂、ピアノ披露）
12月７日（日比谷公会堂）、８，９，10日（産経ホール）、13日（日本青年館）、15日（共立講堂）、16，18，19，21日（日本青年館）、22日（共立講堂）

1958年：
１月11日（日比谷公会堂）、16日（大阪：朝日会館、ショパン協奏曲第１番）、18日（日本青年館）、20，21日（産経ホール）、22，23日（日本青年館）、24日（共立講堂）、26，27，28，31日（産経ホール）
２月７日（第一生命ホール）、20日（日比谷公会堂、ショパン協奏曲第１番）、25日（広島：広大三原分校講堂）、27日（神戸：神戸新聞会館）
３月４日（大阪：朝日会館、ショパン協奏曲第１番）
４月17日（相生：海員厚生会館）、18日（津山：市立第一小学校）、19，20日（岡山：市公会堂）、21日（呉：五番町小学校講堂）
５月10日（大阪：フェスティバル・ホール、カサド）、16日（西宮：神戸女学院講堂、カサド）、？日（皇后陛下、皇太子殿下、御前演奏：カサド、原、バルト）、23日（横浜：鶴見女子高校）、26日（徳山：市民会館）、28日（飯塚：市公会堂）、？日（田川）、？日（福岡）
６月14日（聖心女子大学講堂、カサドと）、19日（読売ホール、カサドと）、21日（東京大学）、24，27日（米子：公会堂）、23日（鳥取：遷喬小学校講堂）、26日（出雲：市立今市小学校講堂）
７月６日（宇都宮：栃木会館）、13日（岡崎：付属中学校講堂）、16、19日（２時、６時半）（広島：市公会堂）、23，24日（札幌：市民会館）、25日（旭川：中央小学校）、26日（芦別：中央会館）、28日（函館：HBC ラジオ劇場）
８月20、21日（姫路：市公会堂）
９月15日（第一生命ホール）、24日（聖心女子大学講堂）、30日（広畑：広畑製鉄所夢前講堂）
10月３日（芦屋：芦屋高等学校講堂）、20日（神戸：国際会館、ショパン協奏曲第１番）、27日（第一生命ホール）
11月１日（２時、６時）（大阪：フェスティバル・ホール）、４日（小松：芦城小学校体育館）、５，６日（岩国：三菱レーヨンホール）、７日（福岡：電気ホール）、11日（福岡：YAMAKATAYA）、12日（飯塚：市公会堂）
［12月３日渡欧］



【写真６】1958年５月16日、カサド来院時に、講堂前にて（秋山ひさ氏蔵）
左より、ラーソン教授、難波紋吉院長、ガスパール・カサド、原智恵子、ヘルムート・バルト（カサドの伴奏ピアニスト）

なお、この時に講堂前で撮られた写真【写真６】も購買部で販売されていたそうである。

演奏家としてこのように東奔西走していた原智恵子にとって、教えることはどのような意味を持っていたのだろうか？それまで演奏一本で自立し、教えることに時間を取られるのをむしろ拒み続けてきたのに、それがここで大きく変化しているのはどうしてだろうか？このような疑問を感じながら当時のインタビュー記事に原智恵子の言葉を追ってみると、以下のような手がかりが得られた。

まず、1956（昭和31）年９月19日の「原智恵子ピアノ独奏会　シューマン没後100年祭記念」プログラムに掲載されたインタビュー記事（事務局下村記）である。ここで原智恵子は、「学びとった芸術の伝統を正しい格調のまま若い人に伝え、更に聴衆と共に進歩してゆくのが私達に課せられた社会的な使命であるし、社会奉仕をしない限り、どんなに自分一人だけ良くても社会文明として成立ってゆくものではない」と語っている。自分が受け継いだ芸術の伝統を次の世代に正しく受け渡すことが芸術家の社会的使命という認識をもっていたことが分かる。

次に、1957（昭和32）年９月９日、京都でのインタビューに答えたものがある（大阪労音機関紙掲載）。そこでは、「日本の音楽界にいま一番必要なのはいい演奏家ではなく、いい教育者ですね。もう、なくなられましたけれど、クロイツァー先生のような人です。本当に先生のされたお仕事は立派なものです。ところが、日本の待遇は、決して良かったとはいえません。こういう人をもっと大切にすべきだと思いますね。あの方の真価をもっと知ってあげてもよかったのではないでしょうか」と述べている。日本の現状を見て、よい演奏家よりもむしろ優れた教育者こそが必要であると考えていたことが知られる。

最後に、『ヤマハニュース』第26号（1958年５月号）の「私の履歴書」コーナーに掲載されたインタビュー記事がある。ここには、「目下お弟子さんは少ない。演奏演奏で多忙だから。しかし今後は、もっと子弟の養成に尽力したい。演奏家は死ねば忘れられてしまうのだから、一人の芸術家としていつまでも記憶されるためにも。これもまた、恩師レヴィ氏から学んだこと

だ」と記されている。

この発言は、先に挙げた1957年６月２日の神戸新聞のインタビュー記事の内容と呼応する。そこでも「[演奏家の仕事は] 線香花火のようにはかない……一生をかけてやった仕事のなかでなにかは残しておきたい―それには私の体験をお弟子さんに伝えるのが最良の方法だと思い直した」と述べていた。そこではさらに、帰国後体調を崩して入院したことが「しみじみ心細いなと思った」きっかけになったことがさらりと語られていた。これは筆者の想像に過ぎないが、おそらく原智恵子は自分が死ぬことを真剣に考え、ピアニストとして後世に残せるものは何かを真摯に考える機会を持ったのだろう。当時はラジオ放送といっても専ら生放送で、NHKでも録音は残されていないという時代である。限られた録音の他に何を残せるかといえば、弟子に伝承することである。それは、功なり名を遂げて四十代に差し掛かった原智恵子が、自分のピアニストとしての人生を見つめ直す中で訪れた一つの転機であったと考えられる。

原智恵子が神戸女学院への赴任を受け入れたもう一つの理由は、月一回教授という緩やかな勤務条件にあったのではないだろうか。上記の神戸新聞の記事でも、「その前にも上野から来てほしいといわれたのですが、この方は週一、二回ということなのでどうも荷が重く、気が進みませんでした」と述べている。人気の高いピアニストとして各地を飛び回る生活と折り合いをつけて教えるのに、月一回というのは現実的なペースであったと思われる。

神戸の出身で、関西に思い入れがあったのも事実だろう。この点については、1958年１月の新聞コラム「旅の空から」[11]が興味深い。関西の長所と欠点をはっきり指摘した上で、音楽教育面での梃子入れの構想を語っている。

> 「永く海外生活をやっていて、かえって日本のよさがわかったように、東京に住んでみて、関西のよさがわかるような気がしますね。関西は東京よりも気候はソフトだし、美しい自然や豊かな環境にも、とても恵まれている。それがかえってアダになって、住んでいる人たちは少しばかりノンビリし過ぎちゃったんじゃないかしら……。その点、東京のカラッ風も、芸術へのきびしい精進の気持ちをふるい立たせるのには役立ちます。今年の抱負？それは関西に、是非とも立派な音楽教育の機関をつくりあげたいことね。なんとか大学といったそんな形式にとらわれるものではなしに、幼児から大人まで、だれでもがいい時に自由に勉強できて、全体の音楽熱がもりあがってくるようなもの。ちょっと理想かな？でも関西にはどうしてもそういうものが必要だと思います」

関西の音楽センター構想は、上記1957年６月の神戸新聞でも語られていたものであるが、結局これは原智恵子の離日によって実現しないままになった。

６）神戸女学院に遺したもの

さて筆者は、女学院時代の原智恵子の活動歴を探る手がかりとして、1957～1960年当時の音楽雑誌の記事を調べていく内に、「原智恵子の弟子」としてピアノ協奏曲でデビューした本学卒業生が四人あることに気が付いた。それは次の方々である。

M65（1948年卒業）研67　秋山（旧姓塚本）保子
M66（1949年卒業）研68　安見（旧姓弘田）泰子
M69（1952年卒業）　菅野（旧姓菅野）瑛子
M74（1957年卒業）　奥村（旧姓辻）智美　（敬称略）

まず、1958（昭和33）年1月30日に神戸新聞会館において「新進ピアニストによる協奏曲の夕べ」が開かれた。そのプログラム[12]巻頭に原智恵子が次のような「ごあいさつ」を書いている。

このたび神戸新聞会館において塚本保子、安見泰子、菅野瑛子さんの三人が関響の御協力を得て、私の門下生として初めての演奏会を開くことになりました。こんな嬉しいことはございません。

この三人のかたたちは神戸女学院音楽部の出身で、菅野さんと安見さんは、浅田綾子先生の御指導を受けられました。いずれも楽曲の表面的な効果を追って、華やかに演奏するようなタイプと異なり、自分の演奏しようとする楽曲を深く研究し解釈することに真面目な努力を続けているかたたちでございます。したがって演奏は知性の勝った幾分地味な印象を与えるかも知れませんが、私としてはこのような「つつましさ」こそ、芸術に打ちこむものにとってもっとも大切な心構えであり、現在の精進にやがては豊かな実りをもたらすものであると信じております。

このように若く才能に満ちた新進ピアニストたちが巣立ち、活躍されることを私は心より喜び、拍手を送るものでございます。そして皆様がこの容易でない芸術の旅をする人たちを今後とも暖かく見守って下さることを、私よりもお願い致します。

ここで「楽曲を深く研究し解釈することに真面目な努力を続けて」、「知性の勝った幾分地味な印象を与える」演奏というのは、それまでの女学院の教育が培ってきた一つの個性であろう。それをよしとして評価しているところに原智恵子の懐の深さが感じられる。

この演奏会については当時の音楽雑誌『音楽の友』で二度取り上げられている。まず1958（昭和33）年4月号では「関西だより」欄に次のような記載がある。

1月30日、神戸新聞会館で原智恵子門下の新進ピアニスト3人による協奏曲の夕が開かれた。菅野瑛子がベートーヴェンの第3番、安見泰子がラヴェルのト長調、塚本保子がシューマンの協奏曲をそれぞれ宮本政雄指揮の関響と協演したが、当夜の出来ではリズム感のよい安見に一日の長が見られた。しかしこの三人ともに神戸女学院音楽部の卒業生で、立派な施設と恵まれた環境をもちながら、とかく楽壇といままで遊離した場所で、お上品に、悪くいえば温室的ふんい気になれつこになつているこの学校の卒業生が、活発な動きをみせてきたことの方をより注目すべきであろう。原智恵子が教授になつてから、この学校のピアノをほとんど買いかえたそうだが[13]、人一倍個性の強い原が、いい刺激を与えて、従来のお嬢さん芸からの脱皮を促進しつつあるのは、興味深い。（38頁）

同５月号には、「[1958年] ３月27日、神戸新聞会館でリモーテル指揮、関西交響楽団の演奏会、ソリストに原智恵子門下の新鋭辻智美が出演、ベートーヴェンの「皇帝」を演奏した」（39頁）とある。

さらに、同７月号の「関西楽壇、上半期に活躍した人々」には、「オーケストラとの協演はずいぶんと多い。新人、旧人とりまぜて多彩だが、傾向として神戸女学院教授になった原智恵子門下の進出が目立つ。一月関響と神戸で協演した塚本保子のシューマン、安見泰子のラベル、菅野瑛子のベートーヴェン第三、また三月リモーテル指揮関響と「皇帝」を協演した辻智美と四人を数える。とかくシリごみしがちな新人を押し出すには、原のような強力な推進者が必要であるらしい」（76頁）と書かれている。

確かに、赴任して１年足らずで４人の卒業生をコンチェルトのソリストとして舞台に立たせるというのは原智恵子ならではの力業であっただろう。原智恵子が赴任して神戸女学院が変わったと内外に強く印象づけた出来事であった。実質的にわずか１年８ヶ月という短い教授期間ではあったが、その間に原智恵子がなした働きは大きなものであったことが知られる。

なお、これら４人を含む卒業生のお弟子さんたちのレッスンは、大学ではなく、芦屋や宝塚の個人宅で行われた。とりわけ芦屋の木下邸はスタンウェイが３台ある上に、奥様が面倒見がよく料理が上手で、原智恵子の定宿となった。場合によっては弟子も泊まり込んで一晩で新曲を一曲さらうといった厳しいレッスンがなされた。要求の高さについていけず落後する弟子も多い中で、自分の厳しい要求に食い付いてくる弟子に対しては徹底的に教え込んだと聞いている[14)]。

短い期間に集中的に弟子たちを押し上げて風のように去っていった原智恵子であるが、その教えは弟子たちによって引き継がれていった。上記四人の内、秋山（旧姓塚本）保子氏は1957年から本学において講師を、1965～1969年には助教授を務め、また奥村(旧姓辻)智美氏は1961～1965年助手、1972年から嘱託講師、1981年から助教授、1987～2000年教授として多数の後進の指導に当たった。

後年、本学百年史編纂に当たっての問い合わせに答えて原智恵子が書いた手紙のコピーが本学史料室に残されている。1980（昭和55）年９月１日付の岡本道雄院長宛の書簡である。そこでもこれらの弟子を育てたことが自分の仕事として振り返られている。女学院赴任に至る経緯なども回顧されている貴重な手紙である。以下に全文を掲げる[15)]。

「今年も残暑きびしく毎日御暑い毎日でございます。

はじめて岡本院長先生に手紙を差し上げますのは、先日日本から神戸女学院の同窓生の大橋敏さん（私の弟子）がみえまして、山下さんといふ方から、十二回卒業の原久子といふのは原智恵子の御母様かどうか聞いてほしいとたのまれて来たのですが……といふ質問をうけたからでございます。

原久子（旧姓中村久子）はたしかに私の母でございまして、私は小さい時から神戸女学院やデ・フォレスト先生の話を母からきかされており、又、私は母を非常に尊敬しており

ましたので、神戸女学院とききますと母のことを想い出し、大変なつかしく思って居りました。

私が神戸女学院につとめるようになりましたのは、その頃の院長、難波紋吉先生が二度も東京の私の宅までおみえになり、神戸女学院大学の音楽学部の発展のためピアノ科の教授としてぜひ来てほしいとおっしゃり、又音楽学部をますますよくするためにはここで声楽の教授にも立派な人がほしいが……と熱心におたのみになったので、私はいろいろ考えて、難波先生の御熱意と母があんなに愛していた学校、母をあんなにすばらしく育てて下さった学校からの御要請にこたえることが、母に対する娘としてのつとめと思って、自分も承諾し、声楽の教授として福沢アクリヴィ先生を御紹介したのでした。

その頃、私はピアニストとして非常に活躍して居りましたので、東京芸大をはじめ東京の他の音楽大学からも教授として迎えたいといふ話が何度も参りましたけれども、私は自分の勉強も大切にしたかったし、一つの所にしばられないでもっと国際的な仕事もしたかったので、皆おことわりして居りましたので、当時の音楽界の人々はどうして私が神戸女学院の教授になったのかと不思議に思ったようでした。

その後、私は世界的なチェロ奏者ガスパール・カサドと会い、結婚してフィレンツェに住むようになり、残念ながら神戸女学院はやめましたが、福沢先生はずっと長く神戸女学院のためおつくしになり、声楽科を今のようにもり立てて下さったように思って居ります。私は短い間でしたけれども、学生のためにも先生方のためにも出来る限りのことをしてピアノ科の発展のためつくしましたことは皆様も御存じのことと思います。その頃教えた人達の中には、豊田寿子[16]、安見泰子、秋山保子（旧姓塚本）、奥村智美が心にのこる人達であり、これらを神戸女学院の音楽学部にのこして来たことは、神戸女学院での教授時代をかえりみる時、私の心のなぐさめの一つでした。

以上、岡本院長先生が神戸女学院百年史の音楽学部関係のことを御書きになると伺い、何かの御参考にもなるかと書かせて戴きました。何しろ忙がしい毎日でございますので、いろいろ心にあふれる思いをまとめるひまも思ふにまかせませんが、この手紙から私の心をお汲みとり下さいましたら、この上ない喜びと存じます。終りに神戸女学院のますますの御発展と院長先生はじめ諸先生方の御健康を念じ、神戸女学院の上に神様の御恵み豊かなことを祈りつつペンをおきます。

一九八〇年九月一日、フィレンツェにて　　原智恵子

神戸女学院院長　岡本道雄先生　御前に

二伸　私はほとんど毎年日本へしばらくの間帰って居りますので、神戸女学院の音楽学院［ママ］の方達とは今でも親しくおつき合して居りますから、その中岡本院長先生にも御目にかかる機会があったらと願って居ります。」

（神戸女学院史料室蔵）

この文面からも、他大学からの就任要請を断っていたのは、自分の勉強や国際的な活躍との

両立が困難だったからであること、敬愛するご母堂が母校の神戸女学院を愛していたこと、優秀な弟子たちを残してきたことを誇りとしていたことが読み取れる。

7）正伝に向けて……書簡の寄贈

このところ、往年のピアニスト再評価の動きが目覚ましい。萩谷由喜子『幸田姉妹―洋楽黎明期を支えた幸田延と安藤幸』（ショパン、2003年７月）、久保田慶一『孤高のピアニスト　梶原完　その閃光と謎の軌跡を追って』（ショパン、2004年10月）、山本尚志『日本を愛したユダヤ人ピアニスト　レオ・シロタ』（毎日新聞社、2004年11月）、萩谷由喜子『田中希代子―夜明けのピアニスト』（ショパン、2004年12月）と立て続けに本が出て、ブームになっているように見える[17]。これに先鞭をつけたのが原智恵子の再評価であったと見ることもできるだろう。

だがこれら一連の評伝に比して、原智恵子の評伝は残念ながら不備が多い。著者の石川康子氏は「ノンフィクション作家」という立場であり、原智恵子に対する作曲家の失恋とその父で文壇の大御所の陰謀といったドラマの方に重きが置かれている。歴史的な前後関係が不明であったり、何より演奏家としての実績（いつ、どこで、何を演奏して、どのような評価を得たのか）が分からないというもどかしさがある。多数の関係者にインタビューして原智恵子の生涯を掘り起こし、再評価の口火を切った功績は評価されるべきだが、原智恵子に関しては今後本格的な伝記が書かれる必要がある。

幸い、正伝に向けての動きはすでに始まっている。まず、本学卒業生でご父君の板倉進氏がパリ時代の原智恵子を支える働きをされた西澤加奈子氏（67大S72）が、約50年に及ぶ交流のうち25年間（1952～1987年）に亘る原智恵子の書簡93通、並びに多数の関連資料を神戸女学院に寄贈下さった。これらは今後整備の上で公開されることになるだろう。

またこれらの書簡について西澤加奈子氏が書かれたエッセイ「原智恵子の手紙―少女の文筐より」（東大仏文・独文関係者を主とする同人誌『ももんが』に2003年４月より2005年１月まで連載）が春秋社の目にとまり、書簡内容を主とした著書『原智恵子の思い出』（仮題）の出版準備が進められているとのことである。

来年2006年、神戸女学院は音楽科創設100周年の節目の年を迎える。これまでの歩みを振り返るよい機会である。今後も卒業生や関係者の協力を仰ぎながら、原智恵子の功績を明らかにしていきたい。

註

1）2003年３月20日付の朝日新聞「忘れられたピアニスト原智恵子、再び輝く」（吉田純子記）によれば、「特設コーナーを設けた東京のヤマハ銀座店の年間売り上げでは、小澤征爾、フジ子・ヘミングに継ぐ売れ行き」とのこと。

2）原智恵子の女学院時代からの弟子である奥村（旧姓辻）智美、湊（旧姓辻）朱美の辻姉妹を始め、後年教えを受けた中村美生子、八木昭子、岩田朋子の各氏に原智恵子の思い出のお話と教えを受けた曲のピアノ演奏を、また本学非常勤講師の林裕氏に原智恵子の夫ガスパール・カサド遺贈のチェロ（1740年製のペトラス・グァルネリ、京都市所蔵）でカサドの作品を演奏して頂いた。

3) 卒業生で神戸女学院理事の秋山ひさ氏談。
4) 山本尚志『日本を愛したユダヤ人ピアニスト　レオ・シロタ』(毎日新聞社、2004年)、234頁。
5) 玉川大学教育博物館館長岡村豊氏とお世話くださった今井良子氏を始めとする学芸員の皆様に御礼申し上げる。
6) マヌエル・デ・ファリャの〈スペイン民謡による組曲〉、エドアール・ラロの〈スペイン交響曲〉作品21、バッハの〈G線上のアリア〉、キュイ〈オリエンタル〉、フォーレ〈夢のあとに〉、ブラームス＝クライスラー〈ハンガリー舞曲〉。
7) 秋山（旧姓塚本）保子。M65回生。1950年から本学音楽学部嘱託講師、1955年から助手、1957年から講師、1965～1969年助教授。原智恵子招聘を熱望し、回りに熱心に働きかけた。赴任後は原智恵子の信頼を得、原が組んでいたチェリスト吉田貴壽の関西での伴奏を託されるほどであった。
8) 総務課に残る人事稟議書には就任年月のみが記載され、退職年月日はない。
9) スーツの上着では弾き難いからと、その場で塚本保子氏のカーディガンを借りて演奏したとのこと。
10) ギリシャ生まれの声楽家。スイス・ローザンヌ音楽院、パリ国立音楽院を卒業。昭和20年12月来日。福沢諭吉の令孫福沢進太郎氏夫人。1957年から1980年まで本学教授（声楽）。
11) 玉川大学教育博物館の原智恵子資料に含まれる新聞切抜き。紙名や年月日は不明だが、記載内容（お正月の話題、春の国際芸術祭）から1958年１月に大阪で取材されたと推測される。
12) 玉川大学教育博物館蔵のプログラムは、弟子たちの他の演奏会のプログラムと共にアルバムにていねいに貼り込まれている。このアルバムも借用して上記写真展で展示した。
13) 原智恵子と楽器買い替えの問題については機会を改めて論じることとする。
14) 原智恵子のレッスンの様子など、聞き書きの部分については機会を改める。なお、上記「原智恵子メモリアル・コンサート」の会場で配布した『原智恵子先生の思い出―神戸女学院の生徒と弟子の手記―』（発行：神戸女学院大学アートマネジメント研究会、2004年12月３日）には、当日の出演者以外の方々の回想を収めており、レッスンの様子なども記されている。
15) 書簡および写真の公開をご子息の川添光郎氏からお許し頂いた。また神戸女学院教育文化振興めぐみ会、神戸女学院大学音楽学部、飯野奈津子氏、秋山ひさ氏からは写真を提供して頂いた。ご理解とご協力に御礼申し上げる。
16) 豊田寿子：1951年から嘱託講師、1953年から講師、1954年から助教授、1961～1974年教授。
17) 幸田延(1870～1946)、梶原完(1924～1989)、レオ・シロタ(1885～1965)、田中希代子(1932～1996)。

本論は神戸女学院大学研究所2004年度研究助成（研究課題名「原智恵子の軌跡―関西での活動歴」）によって支えられている。ここに記して謝意を表する。

（原稿受理　2005年４月15日）